厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）
分担研究報告書

福島県における感染症関連神経疾患の発生動向調査とその病原体検索

研究分担者　細矢光亮　福島県立医科大学小児科　主任教授

研究要旨　2018 年の 1 年間に、福島県において、急性脳炎･脳症 7 例（HHV-6：3例、インフルエンザ A：1例、マイコプラズマ：1例、不明：2例）、ADEM 0例、AFP 3 例（ギラン･バレー症候群：2例、急性弛緩性脊椎炎：1 例）の発生があった

A. 研究目的

感染症関連中枢神経疾患等による小児の入院患者の全数を福島県内全域で継続して把握し、福島県における発生動向を明らかにする。

B. 研究方法

2014年1月より、小児入院施設のある県内全ての医療機関と連携した「福島県内における小児重症感染症等の前方視的発生動向調査」を行っている。この調査対象項目に、急性脳炎･脳症、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、急性弛緩性麻痺（AFP、GBSを含む）等を加え、感染症関連中枢神経疾患による小児の入院患者の全数を把握し、発生動向を調査する。また、可能な限り原因となった病原体を明らかにする。

（倫理面への配慮）

収集する情報は性別と年齢階級のみであり、その他の個人情報は扱わない。

C. 研究結果

2018年1月より12月までの1年間に、福島県において、脳炎脳症が7例あり、病原体はHHV-6が3例、インフルエンザAが1例、マイコプラズマが1例、不明が2例であった。急性弛緩性麻痺が3例あり、ギラン･バレー症候群が2例、急性弛緩性脊椎炎が11例であった。

D. 考察

福島県内で、急性脳炎･脳症は毎年 10 名前後、ADEM および AFP（GBS を含む）は毎年 0～3 名が発生していた。病原体判明率は、前方視的調査開始後上昇傾向にあり、最も多いのはインフルエンザウイルス A 型で、次が HHV-6 であった。インフルエンザウイルス A 型は死亡率が高かったが、HHV-6 は後遺症率が高かった。ADEM、AFP（GBS を含む）の発生は毎年 0～3 名であったが、ADEM、AFP で病原体が判明した例はなかった。

E. 結論

前方視的発生動向調査の結果、福島県内において、急性脳炎･脳症は7名、ADEMおよびAFP（GBSを含む）は3名発生したことが明らかになった。。

F. 研究発表

1.　論文発表
　なし
2.　学会発表
　なし
（

G. 知的財産権の出願･登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得
　なし
2. 実用新案登録
　なし
3.その他
　なし